

## イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から

今野 弘章

和光大学

**【要旨】** 本稿は、「ださっ。」や「気持ち悪っ。」のような、形容詞の終止形活用語尾「い」が脱落し、形容詞語幹が声門の閉鎖を伴って発話された口語表現（「イ落ち構文」）を記述し、当該表現における形と意味の相関関係を明らかにすることを目的とする。統語的には、イ落ち構文は、C, T, Negの機能範疇を欠き、小節（small clause）が主節を形成する“root small clause”（Progovac 2006）の一種とみなすことができる。意味的には、イ落ち構文は、発話時における話者の感覚や判断を、「伝達」ではなく、「表出」する「私的表現行為」（Hirose 1995, 廣瀬 1997）専用の構文である。本稿では、このイ落ち構文の統語的特徴と意味的特徴を照らし合わせ、当該構文において、動機付け・類像性・有標性の相互に関連する観点から、形と意味が恣意的ではなく有機的に結びついていることを論じる\*。

**キーワード：**イ落ち構文、小節、私的表現、類像性、有標性

### 1. はじめに

本稿では、(1)に見られる現代日本語の共通語における口語表現を扱う。

- (1) a. 濃っ。(cf. 濃い。)  
 b. ださっ。(cf. ださい。)  
 c. 短っ。(cf. 短い。)  
 d. あほくさっ。(cf. あほくさい。)  
 e. 気持ち悪っ。(cf. 気持ち悪い。)

(1)に挙げた各表現では、括弧内の例との対比から明らかなように、形容詞語幹が語幹末に声門の閉鎖を伴って発話され、形容詞終止形活用語尾「い」が現れない<sup>1</sup>。

\* 本論文は、日本英語学会第23回大会ワークショップ「多角的視点からのインターフェイス研究に向けて」での発表（2005年11月於九州大学）、及び筑波大学と名古屋大学での講演（それぞれ2007年9月、2008年1月）がもととなっている。本研究の様々な段階において、明石博光、一戸克夫、岩田彩志、大澤舞、岡崎正男、草山学、小平百々子、島田雅晴、田村敏広、廣瀬幸生、茂木俊伸の各氏、各先生方にデータや議論に関してお世話になった。お二人の『言語研究』匿名査読者からは草稿に対する建設的なコメントを数多く頂いた。Adam Jon LebowitzとRobert Rickettsの両氏は英語母語話者として協力してくださった。これらの方々に感謝申し上げる。本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号20720132、平成20～21年度）の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 本論文では、声門閉鎖音を促音の文字「っ」を用いて表示する。なお、イ落ち構文の声門閉鎖音がモーラ資格を持つか否かという問題は、本稿では扱わない。また、本稿では、イ落ち

以下では、(1a-e) のような表現を「イ落ち構文」と呼ぶ<sup>2,3</sup>。

共通語圏では、従来は、「痛っ」や「寒っ」といった特定の語彙しかイ落ち構文で用いられることはなかった。だが、現在では、以下の観察が示すように、従来よりも幅広い形容詞がイ落ち表現として用いられている (杉浦 2006 も参照)。

- (2) A 「先輩、仕事終わりました」「えっ、早っ」  
B 「ヤッター、五連勝だ」「うわあ、強っ」

最近、関西だけでなく東京でも、若い人たちが傍線部のような形容詞の使い方をする。以前なら「早い (ね)」「強い (なあ)」と「い」を使ったところが促音「っ」になっている。同様の例に「すごっ」「きつっ」などがある。

関西では、昔から「ああ寒」「くさ～」などの「い」のない形容詞形が、普通に使われてきた。その変形として、語尾に促音がついているのである。これが、関西のお笑いタレント経由で、全国的に広まりつつあるらしい。

もっとも、足を踏まれた時、標準語形でも「痛っ」という形は現れる。「痛っ」は受けた感覚を反射的に表現するわけで、「っ」は瞬間的な感覚表現として似つかわしい。それに対して、冒頭の例はそれほど急いで言う必要はないはず。しかし、若い人たちは反射的に返答するのである。深く考えてじっくり話すより、瞬間的に感じたことをやりとりするのが大事とみえる。その結果、会話の内容は当然「浅っ」。

武庫川女子大教授 [佐竹秀雄]

(「イなし形容詞」読売新聞 (大阪夕刊) 2003 年 5 月 6 日)

- (3) 日本の最近の若い人たちのあいだでは、[中略]「いたっ」のような言表が、いわゆる感覚・感情表現を超えて拡がっている、と聞きました。[中略]  
確かに驚きに満ちた感動が問題になっているのでしょうか、このように間投詞的な叫びのような表現が拡大し続けるようだと、ちょっと問題です。[中略] 近い将来、これも日本語の文法的な文になるのでしょうか。少し心

構文 (例：うまっ。) と通常の形容詞表現 (例：うまい。) との間に、前者が後者から終止形活用語尾を取り去ることで作られるというような派生関係は想定していない。

<sup>2</sup> イ落ち構文で用いられる形容詞語幹には、2 モーラからなるものが多い。だが、この傾向はあくまでも典型であり、2 モーラ以外の語幹を含む例は豊富に存在する (杉浦 2006、富樫 2006 参照)。本稿では、語幹のモーラ数に関する制約は特に設けずに議論を進める。

杉浦 (2006) が指摘するように、各イ落ち表現ごとに定着の度合いは異なる。特に、1 モーラのイ落ち表現は、定着度が低く容認しない話者も多い。本稿では、「濃っ」が Google 検索で 1520 件見つかったこと (2005 年 10 月 11 日時点)、「ヒゲ濃っ」のように主語を表示してやると、元の形容詞を復元しやすくなるため、「濃っ」だけでは容認しなかった話者も容認するようになることを考慮し、1 モーラのイ落ち表現も原則としては容認可能だとみなす。

<sup>3</sup> 富樫 (2006) は、形容詞の終止形活用語尾が脱落する現象には、「促音型」(例：たかっ。), 「長音型」(例：たかー。/ たっかー。), 「非促音非長音型」(例：たか。) の 3 つがあると指摘している。本稿がイ落ち構文と呼び分析対象とするのは、富樫が「促音型」と呼ぶもののみである。

配です（と書きましたら、関西ではこの言い方は以前から定着しているという指摘を受けました）。（ドルズ・小林 2005: 195）

共通語圏におけるイ落ち構文の使用が（2）や（3）のように社会的に意識されることと並行して、言語学の分野でも、杉浦（2006）や富樫（2006）など、当該構文の形式的特徴や意味的特徴を観察する記述研究が徐々に行われるようになってきた。だが、筆者の知る限り、イ落ち構文の統語的特徴と意味的特徴の全体像を示し、さらに両者がどのような相関関係にあるかを原理的に考察した包括的研究は行われていない。本稿は、先行研究の事実観察も踏まえながらイ落ち構文の形式と機能の全体像を示し、その上で、当該構文の存在意義を形と意味のインターフェイスの観点から明らかにする<sup>4</sup>。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、イ落ち構文の統語的特徴を観察し、この構文が小節（small clause）を主節とする“root small clause”（Progovac 2006）の一種だということを示す。3節では、意味的観点から考察を行い、イ落ち構文が、概略、発話時における話者の感覚や判断を、「伝達」ではなく、「表出」する「私的表現行為」（Hirose 1995, 廣瀬 1997）専用の構文だということ論じる。4節では、2節と3節で指摘した統語的特徴と意味的特徴を照らし合わせ、イ落ち構文の形と意味の間に一般的かつ規則的な対応関係が成り立っていることを論じる。5節では本稿の議論をまとめ、今後の発展の可能性を指摘する。

## 2. イ落ち構文の形式

本節では、イ落ち構文の統語的特徴を記述し、この構文が小節（small clause, 以下、「SC」と略記）が主節を成す統語的に「不完全な」構文だということを示す。以下では、形容詞を述語とする単文一般の統語構造を（4）のように仮定した上で議論を進める。

(4) [CP ... [TP ... [NegP ...] [SC ...] ] ] ]

(4) の一般的な文構造との関連で先の主張をより具体的に述べると、イ落ち構文は、主語－述語構造（(4) の SC 部）のみを備えており、それよりも構造的に上位に位置する否定辞（Neg）、時制辞（T）、補文化辞（C）の各機能範疇及びその投射（(4) の破線で囲んだ部分）は持たないということになる。以下では、上記の特徴を（4）の階層構造に下から対応する順に確認していく。

<sup>4</sup> 本稿では、イ落ち構文の発信源とされる関西語圏での同種の表現については議論しない。理由は、関西語圏と共通語圏のイ落ち構文は、共通する部分はあっても、構文的に異なっている可能性があるからということ、筆者が関西方言の言語直観を持ち合わせていないためである。両方言におけるイ落ち構文の異同については、今後の研究に委ねる。

## 2.1. SC の存在

まず、主語－述語構造について考えてみたい。(1)でも観察したように、イ落ち構文は、通常は一語で発話され、一語文的に映る。だが、イ落ち構文は主語を取ることができる(富樫 2006 参照)。

- (5) a. おじいちゃん若っ。(携帯電話の TVCM からの実例)  
b. これうまっ。

この事実から、イ落ち構文は、ゼロレベルの表現ではなく、主語－述語構造を備えた句レベルの表現だといえる<sup>5</sup>。

## 2.2. Neg の欠如

イ落ち構文は、(5)で観察したように叙述構造を備えてはいるものの、否定化を許さない(ドルヌ・小林 2005 参照)。

- (6) a. \*寒くなっ。(cf. 寒っ。)  
b. \*臭くなっ。(cf. 臭っ。)

(6)の非文法性から、イ落ち構文は、(4)において叙述関係を導く SC 投射の上位に位置し、否定の「な(い)」を導入する機能範疇 Neg を欠いているといえる。

以下の例は、否定の「な(い)」を含むイ落ち表現であり、一見すると上述の特徴と矛盾するように思われる。

- (7) つまんなっ。

「つままない」という形容詞には形態的に対応する肯定形が存在しない。そのため、「つままない」における「ない」は語彙化された要素であり、Neg が具現した場合の「ない」とは異なる。このことは、「つままない」が否定極性語彙項目である「少しも」を認可しないことから支持される。

- (8) \*これ少しもつままない。(cf. これ少しも {面白くない / \*面白い})。

従って、「つままない」は Neg を含まないと考えることができ、(7)は本節の議論にとって問題とはならない。

さらに、以下の例について考えてみたい。

- (9) <sup>ok</sup>/\*かわいくなっ。

<sup>5</sup> 本稿では、イ落ち構文が主語を持つという統語的特性を、「若っ」のような新用法のみではなく、従来からある「痛っ」などの旧用法にも共通して備わっているものとみなす。これは、2.4 節で論じるように、「痛っ」なども、環境を整えれば主語を言語化することが可能だからである。また、本稿では、主語を持つという特性が、旧用法から新用法へ継承されたものか、新用法が浸透することによって旧用法にももたらされたものかという史的問題には立ち入らない。以上の内容に関し、匿名査読者からの指摘が有益であった。

「かわいくない」は、対応する肯定形「かわいい」が存在することから、分析的な否定表現だといえる。ここでの議論は(9)が容認されないことを予測するが、実際には、このイ落ち表現を容認しない話者だけでなく、容認する話者も存在する。容認しない話者については問題ないが、容認する話者が存在するという事実は上での議論に対する反例となる可能性がある。しかし、この事実も(7)と同様に扱うことができる。「かわいくない」の意味を考えてみると、当該の語彙が「憎たらしい」や「不細工だ」といった形容(名)詞一語に書き換え可能な場合があることが分かる(この書き換え可能性は「かわくなっ。」を容認する話者にも確認済みである)。そのため、当該のイ落ち表現を容認する話者は、「かわいくない」の「ない」をその場しのぎ的(ad hoc)に語彙化させ、形態的に「つまらない」と同様の形容詞として解釈している可能性が高い。その証拠に、対比の「は」を形容詞語幹と否定辞の間に挿入したイ落ち表現は一律に容認されない。

(10) \*かわいくはなっ。

これは、「は」が挿入されることで語彙化の可能性が形態的に排除されるためである<sup>6</sup>。

### 2.3. Tの欠如

1節冒頭で述べたように、イ落ち構文は、形容詞語幹が語幹末に声門の閉鎖を伴って発話されたものであり、そこに形容詞終止形活用語尾「い」は現れない。

(11) うざっ。

この表面的な特徴から、イ落ち構文は終止形活用語尾を欠くと考えられる。以下では、イ落ち構文を終止形活用語尾を含まない表現とみなす統語的根拠及びその意味合いについて考えていく。

まず、イ落ち構文が本当に終止形活用語尾を欠いているのかどうかについて考えてみたい。一見したところ、イ落ち構文の声門閉鎖音を終止形活用語尾「い」が変形したものと捉えること(杉浦 2006 参照)も可能なように思えるかもしれない。しかし、(2)の引用にも「『っ』は瞬間的な感覚表現として似つかわしい」とあるように、イ落ち構文の声門閉鎖音は、「あっ」などの反射的な発話で用いられるも

<sup>6</sup> この説明に対し、匿名査読者より、(10)が容認されないのは、語彙化の阻害ではなく、話し手の「強い気持ち」が表せなくなるからではないかとの指摘があった。この分析には2点問題がある。まず、「『は』を用いると強い気持ちを表せない。」ということが必ずしも成り立たない。問題の例で用いられている「は」は対比の「は」である。このタイプの「は」を用いて、「君、昨日は良かったのに、今日は全然ダメじゃないか!」と言った場合、話し手は聞き手を強く非難していると考えられる。次に、「強い気持ち」という基準を用いると説明が難しくなる例がある。強い気持ちは「なんて」を用いて表すこともできるが(例:軽々しく「死ぬ」なんて言うな!),「\*かわいくなんてなっ。」というイ落ち表現は依然として容認されない。語彙化の阻止の観点からは、「\*かわいく {は/なんて} なっ。」は同様に説明可能である。

のと同等のものであり、「い」の変異形とは考えにくい。このことは、イ落ち構文に終助詞を付加できるかどうかを観察すると、より一層明らかになる。

一般に、形容詞に終助詞を付加する際には、形容詞語幹が終止形活用語尾によって支えられていなければならない。

(12) うまい {なあ／よ}。

イ落ち構文の声門閉鎖音が終止形活用語尾の変異形であるならば、(12)と同様、イ落ち構文は終助詞の付加を許すはずである。しかし、イ落ち構文には終助詞を付加することができない。

(13) \*うま (っ) {なあ／よ}。

(13)の非文法性から、イ落ち構文が終止形活用語尾を欠くことが分かる。

イ落ち構文の声門閉鎖音が形容詞終止形活用語尾の変異形ではないということは、イ落ち構文「うまっ」と口語表現という点で類似している「うめえ」との比較からも支持される。「うめえ」は通常の「うまい」という表現の形容詞語幹の一部と終止形活用語尾が変形したものである。形態上の違いはあるものの、「うめえ」と「うまい」は終止形活用語尾を含むという点では同質である。そのため、(12)と同様、「うめえ」は、終助詞の付加を許し、イ落ち構文とは異なる振る舞いを示す。

(14) うめえ {なあ／よ}。

以上のことから、イ落ち構文は終止形活用語尾を欠いた形態統語的に不完全な表現だといえる。

イ落ち構文が形容詞終止形活用語尾を欠くという特徴と形容詞終止形活用語尾が一般に果たす役割とを照らし合わせてみると、この構文の1つの重要な統語的特徴が明らかになる。「うざい・うざかった」という対比が示すように、形容詞終止形活用語尾は定形節において統語的時制辞の役割を果たす (Nishiyama 1999 参照)。従って、イ落ち構文が終止形活用語尾を欠くという形態的特徴から、当該構文が機能範疇 T を持たないことが分かる。

イ落ち構文が T を欠くという特徴から、主格(「が」格)付与に関して1つの予測が成り立つ。まず、Takezawa (1987)、竹沢 (1998) の分析に基づき、日本語における主格付与の仕組みについて考えてみたい。竹沢によれば、日本語で名詞句に主格が付与されるためには、(定形の) T が存在しなければならない<sup>7</sup>。この対応関係は (15) の対比によって裏づけられる。

<sup>7</sup> 日本語の統語構造に T が存在するか否かという点に関しては、研究者間で意見が分かれる (Fukui 1988, Fukui and Sakai 2003, Takezawa 1987, 竹沢 1998 参照)。本稿では、Takezawa (1987)、竹沢 (1998) に従い、日本語(の時制文)には、統語的な時制辞が存在するとの仮定の下で議論を進める。

- (15) a. 太郎は [花子の横顔 {が／を} とても美しいと] 思った。  
 b. 太郎は [花子の横顔 {?\*が／を} とても美しく] 思った。

(竹沢 1998: 50)

(15a) の補文は、「美しい」という終止形を含む定形節であり、Tを持つ。この場合には、補文主語の「花子」を主格標示することができる。一方、(15b) の補文は、「美しく」という連用形述語が用いられていることから分かるように、非定形節でありTを持たない。そして、この非定形節補文では補文主語を主格標示できず、補文主語には主節動詞から例外的に対格が付与される。(15) の対比から、主格付与にはTが必要だということが分かる。

ここで、(5) で観察したイ落ち構文では主語を表現することができるという特徴を思い出してもらいたい。(15) で見たTの存在と主格付与の相関を踏まえると、イ落ち構文にTが存在しないことは、当該構文に主格付与子が存在しないことを意味する。従って、イ落ち構文の主語には主格を付与できないことが予測される。事実、イ落ち構文では、主語を導入できても、その主語を主格標示することはできない(富樫 2006 参照)。

- (16) a. \*おじいちゃんが若っ。(cf. おじいちゃん若っ。(= (5a))  
 b. \*これがうまっ。(cf. これうまっ。(= (5b))

(13) で観察した形態・統語的特徴と(16)の事実を踏まえると、イ落ち構文にはTが存在しないといえる<sup>8</sup>。

イ落ち構文がTを欠くという結論は以下の議論にとって重要である。そのため、次節に移る前に、この分析に対する可能な反論について考えておきたい。まず、イ落ち構文が(不可視の)非定形のTを持つという分析は妥当ではない。これまで観察した例において形容詞連用形活用語尾「く」が現れていないことから分かるように、イ落ち構文に非定形のTが存在することを積極的に示す経験的証拠は存在しないからである。

次に、イ落ち構文の形容詞語幹が英語の法助動詞のようにTを内包しているという分析も妥当ではない。その分析では、イ落ち構文にTが存在することになり、主語を主格標示できないという当該構文の特徴を説明できないからである。

最後に、イ落ち構文に(15b)のような例外的格付与構造が見えない形で存在しているとする分析も妥当ではない。イ落ち構文の主語は(主格だけでなく)対格でも標示できないからである。

<sup>8</sup> この分析から、イ落ち構文では、格付与構造が存在しないため、主語が格に関して無標(unmarked)な状態で現れているという帰結が導かれる。イ落ち構文の主語が、無標の格(default case (Akmajian 1984, Progovac 2006))を持つのか、あるいはそもそも格を持たないのかという理論的問題にはここでは立ち入らない。どちらの立場を取ったとしても、以下の議論に影響はない。

(17) \*おじいちゃんを若っ。

従って、イ落ち構文には定形／非定形を問わずTが存在しないといえる。

#### 2.4. Cの欠如

イ落ち構文にTが存在しないということは、その上位に位置する機能範疇Cも存在しないことを意味する。従って、イ落ち構文ではCの存在と関連する現象が観察されないことが予測される。一般にCと関連すると考えられている現象に主題化と疑問化がある。この仮定に従えば、イ落ち構文では、Cが存在しないため、主題化も疑問化もできないという予測が成り立つ。まさにこの予測を裏付ける振る舞いとして、イ落ち構文は、(16)で見たように主語の主格標示を許さないだけでなく、主語を主題の「は」で標示することも許さない。

- (18) a. \*おじいちゃんは若っ。(cf. おじいちゃん若っ。(= (5a))  
 b. \*これはうまっ。(cf. これうまっ。(= (5b))

この事実は、イ落ち構文が叙述構造を備えているという2.1節の主張とは矛盾しない。ドルヌ・小林(2005: 186f.)は、(18)と同様の「\*私は痛っ。」という観察をもとに、イ落ち構文は主語を持たず、叙述機能も持たないという議論を展開している。だが、(5)と(18)の対比から明らかなように、問題の例がおかしいのは、主語が現れているからではなく、主語に付加されている「は」が原因である。

さらに、ドルヌ・小林は容認可能と判断しているものの、「私 {は/が} 痛い。」という通常の形容詞文自体の適格性が疑わしい。ドルヌ・小林も自ら指摘しているように、「私 {は/が} 痛い。」が容認されるためには、例えば、「あなたは(首が)痛くないかもしれないが、私は痛い。」というような「対比」の文脈が必要である。どこかに痛みを感じその感覚を表出する通常の文脈では、「耳が痛い。」のように、経験者は言語化せず痛む部分を主語として表すのが普通である。加えて、主語名詞句は、「は」ではなく、「が」で標示するのが自然である<sup>9</sup>。このような条件を整えれば、例えば、急に寒い戸外に出て、

(19) うっ、耳痛っ。

と発するのには何ら問題がない。従って、ドルヌ・小林の観察は本稿の議論に対する反例とはならない。

Cとイ落ち構文の関連に話を戻そう。イ落ち構文は疑問文として用いることができない(ドルヌ・小林2005参照)。

<sup>9</sup> これは、一般に感覚を表出する際には、主語の存在を認識してそれについて述べる categorical judgmentではなく、出来事・状況全体を一まとめに認識するthetic judgmentを行っているためだと考えられる。(両タイプの判断の日本語文法との対応についてはKuroda 1972及び本稿注16を参照、両判断と知覚の対応についてはIwasaki 2006を参照。)



- (20) a. \*この部屋臭っ？  
b. \*何臭っ？

(18) と (20) の振る舞いから、イ落ち構文が C を欠くことが分かる。C は T の上位に投射される要素のため、この特徴はイ落ち構文が T を欠くという統語的特徴からの帰結である<sup>10</sup>。

2.3 節と本節で観察したように、イ落ち構文の主語は、主格を付与されず、主題化もされない ((16), (18) 参照)。本稿は、この事実をイ落ち構文が T 及び C を欠くという統語的特徴に関連付けて説明した。この主張に対し、富樫 (2006: 169) は以下の問題を指摘している。

- (21) a. 今野 (2005) によれば、[イ落ち構文] では時制辞 (活用語尾) が欠けているために主格が標示できないという。しかし、[(21b)] の例のように、いわゆる「ハーガ」構文を [イ落ち構文] にすると、主格だけではなく主題のハも必ず脱落するため、一概に統語的な要因によるものとは言い難い。  
b. (この) 象 (\*は) 鼻 (\*が) 長っ。

富樫 (2006) には (21b) の事実に対する説明はないものの、(21a) の指摘が正しいとすると、本稿の分析が誤りである可能性が生じる。だが、イ落ち構文は、T 及び C を欠くため、主語に対する主格付与も主題化もできない。従って、(21b) の事実は、反例ではなく、むしろ、ここでの分析が予測する帰結ということになる。

ここで、「(この) 象鼻長っ」という (21b) のイ落ち表現が容認されること自体が本稿の分析にとって問題だと考えることも可能かもしれない。というのも、「(21b) における『(この) 象』は『は』を伴っていてもいなくても主題であり、従って、(21b) が容認されることはイ落ち構文に C (ひいては T) が存在することを意味する」と考えることも可能だからである。事実、(21a) の指摘からも分かるように、富樫は、「(この) 象鼻長っ」というイ落ち表現は「(この) 象は鼻が長い」という「ハーガ」構文を元にしていう前提で議論を展開している。だが、この前提は必ずしも成り立たない。(21b) と関連する構文が、「ハーガ」構文ではなく、多重主格構文 (例: (この) 象が鼻が長い (こと)) である可能性も十分にあるからである。従って、(21b) からイ落ち構文の統語構造に C (及び T) が含まれるということはいえない。

本節の最後に、イ落ち構文における「が・は」付与との関連で、以下の事例について考えてみたい。

<sup>10</sup> 主題化に関しては、主題化される要素が TP に付加 (adjoin) するという考えもある (Radford 1997: 312f 参照)。この分析を採用した場合でも、本稿の分析は (18) の事実を捉えることができる。T を欠くイ落ち構文では、主題化要素が付加される TP が投射されず、主題化の可能性が統語的に排除されるからである。

- (22) a. 私たちは「天麩羅懐石」ランチ付きだったのですが、これがうまっ！  
 (http://4travel.jp/e/aol-tips/traveler/yamarin/)
- b. 車の中でカスタードロングを家族で食べました。これはうまっ！  
 (http://plaza.rakuten.co.jp/oisolife/diary/200702110000/)

(22) では、イ落ち構文の主語が「が」や「は」で標示されており、一見したところ、本稿の主張とは矛盾するように思われる。しかし、(22) の例は、純粋なイ落ち構文ではなく、(23) に示すようなイ落ち構文を直接話法として埋め込んだ文が省略を受けたものと考えられる。

- (23) これ ~~が~~/~~は~~ 「うまっ」って感じだ (った)。

(23) への書き換え可能性が示すように、(22) のイ落ち相当部分は形容名詞化していると考えられる<sup>11,12</sup>。従って、(22) の例は、イ落ち構文からの形容名詞化（富樫 2006 参照）という点で関連はするものの、本稿がイ落ち構文と呼ぶ現象とは別個のものであり、ここでの分析に対する反例とはならない。

## 2.5. 主節現象として

これまでの観察から、イ落ち構文が主語－述語構造は持つものの、C, T, Neg の機能範疇を欠いていることが明らかになった。この結果を (4) の一般的な句構造との関連で捉え直すと、イ落ち構文は小節 ((4) の SC 部) のみで成り立っている構文といえる。この結論との関連で興味深いことに、イ落ち構文は主節現象であり、埋め込むことができない。

- (24) \*太郎は [花子うざっ] 思った。(cf. 太郎は [花子をうざく] 思った。)

また、イ落ち構文を、統語的に主節と同じ資格を持つ直接話法補部として用いることには問題がない（イ落ち構文と直接話法補部の関連については 3.3 節も参照）。

- (25) 花子は山岡家のラーメンを食べ、「これうまっ」と言った。

本節の観察から、イ落ち構文は小節が主節を成す構文だといえる。一般に小節が補文として機能することを考えると、イ落ち構文は統語的に特殊な構文だといえる。

<sup>11</sup> 匿名査読者から「これって頭でかっ！」という例が容認可能であるとの指摘があった。この例では、イ落ち構文が「って」による主題化を許しているように映る。だが、筆者の直観では、この例においても、(22b) と同様、主題に後続する部分（「頭でかっ」）は直接話法的解釈を受ける。このように、「って」による主題化は、「は」による主題化と同様に考えることができ、本稿の分析に対する問題とはならない。

<sup>12</sup> 直接話法的要素が形容名詞として用いられる現象は、イ落ち構文に限られるのではなく、「年賀状ホントそろそろやらなくっちゃだね。(http://topokyun.at.webry.info/200712/article\_6.html [下線筆者])」のような例が示すように、砕けた文体では頻繁に観察される。また、「これは超うまだ」や「これは激やばだ」という表現における「超うま」や「激やば」においても、イ落ち表現の形容名詞化が起こっていると考えられる。イ落ち表現の形容名詞化は「超」や「激」などの程度を表す要素が付加した際に起こりやすい。ここではこの傾向を指摘するに留める。

## 2.6. イ落ち構文の統語構造

これまでの観察をまとめると、イ落ち構文は小節が主節を成す形態統語的に「不完全な」構文だということができる。ここで、Stowell (1983) に従い、小節の投射はその述部の語彙範疇が決定すると仮定すると、イ落ち構文の統語構造を以下のように表示することができる。

(26) [AP<sup>[\*埋め込み]</sup>] (主語名詞句) 形容詞語幹<sub>[+声門閉鎖]</sub><sup>13</sup>

(26) において、主語名詞句を囲む丸括弧は当該の要素が省略可能だということを表す。下付きの角括弧で示した<sup>[\*埋め込み]</sup>はイ落ち構文が主節現象であること、<sub>[+声門閉鎖]</sub>はイ落ち構文の形容詞語幹が語幹末に声門の閉鎖を伴って発話されることを表す。

(26) の統語構造は2つの理論的意味合いを持つ。Progovac (2006) は、(主に) 英語において小節がそのまま主節として用いられる場合があることを指摘し、それらを“root small clause”と呼んでいる。(26) の構造が正しいとすると、イ落ち構文は root small clause が日本語においても存在することを示す証拠となる。

もう1つの理論的意味合いは Chomsky (2000) で提案された「位相 (phase)」の概念に関するものである。位相とは、極小主義の枠組みにおいて、統語構造が発音部門と解釈部門の各インターフェイスへ送られる際の命題的単位のことをいう。この位相理論のもとで、Yokogoshi (2003) と den Dikken (2006: 112ff., 259, n.42) は小節が位相の資格を持つと提案している。(26) の構造が正しいとすると、イ落ち構文は、まさに小節が各インターフェイスへ送られた結果成立している言語表現といえ、小節を位相とみなす Yokogoshi と den Dikken の主張を支持する。

## 3. イ落ち構文の機能

本節では、イ落ち構文の意味的側面に注目する。前節では、小節が主節として機能しているという点で、イ落ち構文が統語的に特殊だということのみだが、この構文は、統語的にだけでなく、意味的にも特殊な振る舞いを示す。以下では、イ落ち構文の意味的特徴を、大きく (i) 発話場面、(ii) 時制解釈、(iii) 伝達意図の3つに分けて観察し、この構文が、概略、発話時における話者の気持ちを、「伝達」ではなく、「表出」する構文だということを論じる。

<sup>13</sup> 本稿では、(26) の Stowell 流の小節構造を仮定するに留め、Bowers (1993) や den Dikken (2006) による叙述関係を機能範疇の投射と捉える分析は採用しない (Bowers の分析の日本語への応用については、Nishiyama 1999, 小林 2005 を参照)。理由は、イ落ち構文にそのような機能範疇が存在することを積極的に示す経験的証拠がないためである。(機能範疇の認定基準については Thráinsson 1996, Fukui and Sakai 2003 を参照。同一言語内でも構文ごとに所与の機能範疇の有無が異なる可能性があるという経験的議論については Costa and Gonçalves 1999, Pereltsvaig 2006 を参照。また、言語や構文の違いを超えて機能範疇の存在を一律に仮定すべきという最近の議論は Sigurðsson and Maling 2009 を参照。)

## 3.1. 発話場面

イ落ち構文の述部を形成する形容詞語幹は、話者の感覚に関わるもの（例：「いたっ。」）と、話者の判断に関わるもの（例：「はやっ。」）に大別される。そして、その感覚や判断は、話者が発話時点で接している状況、すなわち話者の眼前の状況を対象とする（笹井 2005, 富樫 2006 参照）。この点を (27) の例をもとに考えてみたい。

- (27) a. 男の子みたいにさっぱりした感じの女の子（大学生）がいます。[中略]最近始めた「エリーゼの為に」が意外と難しいそう。で、ちょっとした体の使い方のコツを話して、ちょっとした練習を数分したら弾けちゃって、その瞬間、自分でびっくりして、「はやっ！！」（爆）…そんなに、驚かんでも…<sup>14</sup>

(<http://homepage2.nifty.com/Ainoyume/page025.html>（下線筆者））

- b. 今回のブルーチーズは結構気合の入ったアオカビ君が沢山いらっしやいました。切ってる時に思わず「くさっ！！」（笑）

(<http://www.geocities.com/jp/Bookend-Shikibu/8180/html/Diary-03.10.htm>（下線筆者））

(27) では、下線部の状況描写にあるように、話者がピアノを弾いた瞬間の判断、チーズを切った瞬間の感覚が、それぞれ、「はやっ」、「くさっ」というイ落ち表現によって表されている。この例が示すように、イ落ち構文が表す話者の感覚や判断は話者の眼前の状況に向けられる。この特徴から、イ落ち構文は、仁田（1997）の「事態即応型」表現、岩崎・大野（2007）の「即時文」に相当するといえる。

イ落ち構文が持つこの特徴は、主語の直示性と関連する場合がある。

- (28) {この／\*あの} パンうまっ。(cf. {この／あの} パンはうまい。)

ある対象の味は、通常、実際にその対象を口に入れて味わってみないと判断できない。この一般的特性と関連して、(28) が示すように、「うま」という形容詞語幹をイ落ち構文で用いる場合、話者の近くにあり、その場で実際に口にして味わうことができる「このパン」は主語に容認されるが、話者から離れており、その場で口にして味を判断することができない「あのパン」は主語に適さない。ちなみに、視覚の場合には、味覚とは異なり、発話時点において話者から離れているものでも直接知覚することができる。そのため、視覚と主に関連する「速」という形容詞語幹が

<sup>14</sup> (27a) は、「自分でびっくりして」という状況解説を含む。また、『広辞苑<sup>5</sup>』などの辞書をはじめ、イ落ち構文を「感嘆詞」に分類する先行研究も存在する（砂川 2004: 131, ドルヌ・小林 2005: 187, 杉浦 2006）。(ただし、2.1 節で論じたように、イ落ち構文は、主語を取ることができるとは、統語的には語レベルではなく句レベルの表現である点に注意されたい。) これらから、イ落ち構文が「驚き」の意味成分を含むと考えることも可能に思われるかもしれない（笹井 2005 参照）。だが、以下で観察する意味的な特徴とは異なり、イ落ち構文が「驚き」を表すことを明確に示す文法的な証拠は存在しない。そのため、本稿では「驚き」をイ落ち構文の本質的な意味成分とは考えずに議論を進める。この点に関し、匿名査読者からの指摘が有益であった。

イ落ち構文で用いられる際には、主語の直示性は制限されない。

(29) {この／あの} 車速っ。

さらに、イ落ち構文が表す話者の感覚や判断は直感的なものが基本である。それに伴い、瞬時には判断したり感じたりしにくい理性と関連する形容詞は、イ落ち構文では用いられにくい（以下、「#」は当該の意味では用いられにくいことを示す）。

(30) \*正しっ。

(31) #（「怪しい」の意味で）臭っ。

以上をまとめると、イ落ち構文は、話者が眼前の事態に対して直感的な感覚や判断を表す場面で用いられるといえる。

### 3.2. 時制解釈

イ落ち構文が話者の眼前の事態に対する直感的な感覚や判断を表すことに伴い、当該構文の時制解釈も制限を受ける。すなわち、イ落ち構文の時制解釈は、「話者の眼前」、つまり「発話時」に密着する。再び (27b) を例に考えると、話者が問題のチーズを臭いと感じるのは、「くさっ」と発話した瞬間だけであって、それ以外の時点は問題とならない。あるものを臭いと感じた場合、通常、その感覚は、臭さを感じた瞬間だけでなく、ある程度の期間持続する。だが、言語表現としてのイ落ち構文は、話者の発話した瞬間のみの感覚や判断を切り取る。

この特徴は、中右 (1994) の現在時制の2分類を用いると、より正確に記述できる。中右 (1994) によれば、いわゆる「現在時」は、「瞬間的現在時」と「持続的現在時」の2つに分類される。「瞬間的現在時」とは、文字通り、話者が発話するまさにその瞬間のみを切り取った点的な現在時解釈である。一方、「持続的現在時」とは、瞬間的現在時を含む、ある一定の幅を持った線的な現在時解釈のことをいう。この分類に従うと、イ落ち構文の時制解釈は瞬間的現在時に固定されているということになる<sup>15</sup>。

イ落ち構文の時制解釈が瞬間的現在時に固定されていることは、当該構文における属性形容詞の解釈からも確認できる。

(32) 海青っ。

(32) が可能な文脈は、例えば、車を運転している際、突然視界に入ってきた海の青さに反応した場合である。その場合、話者の目にした海が発話したその時点で「青く見える」のであって、他の時点における当該の海の青さや海一般の青さは問

<sup>15</sup> イ落ち構文が瞬間的現在時解釈を受けるという意味の特徴は、2.3節で観察した当該構文がTを持たないという統語的特徴と矛盾するように思われるかもしれない。だが、両特徴は「形と意味の無標性の一致」という観点からするとむしろ整合的と考えられる。この点については4.2節を参照。

題とならない。(32)の例の解釈は、イ落ち構文がその場の「見え」のみを切り取ることを示す。このことを stage-level と individual-level の述語分類を用いて述べ直すと、イ落ち構文は瞬間的現在時の場面のみを切り取るため、恒常的特性を表す (individual-level) 読みを許す「青」のような形容詞語幹が当該構文で用いられた場合でも、その解釈は一時的特性を表す (stage-level) 読みを強制されるといえる (他言語における同様の解釈強制については Progovac (2006) と Paesani (2006) を参照)<sup>16</sup>。

イ落ち構文が現在時解釈、とりわけ瞬間的現在時解釈を受けるということは、文法現象との関連からも確認できる。まず、イ落ち構文は過去や未来を表す副詞相当表現とは共起できない。

(33) これ (\*さっきは / \*明日になれば) うまっ。

「さっきは」、「明日になれば」という副詞相当表現は、文の時制解釈をそれぞれ過去時、未来時に固定する。イ落ち構文は、構文の内在的特性として現在時解釈を受けするため、両副詞表現が要求する時制解釈とは調和しない。

次に、イ落ち構文は状態の継続を表す副詞「ずっと」とも相性が悪い。

(34) \*海ずっと青っ。

副詞「ずっと」は文の時制解釈を持続的なものに強制する。イ落ち構文は、時制解釈が現在時の中でも瞬間的現在時に固定されているため、過去時や未来時だけでなく、持続的現在時を表すこともできない。従って、「ずっと」の語彙特性とイ落ち構文が持つ瞬間的現在時解釈が整合せず、(34)は容認されない。

### 3.3. 伝達意図

イ落ち構文が表す瞬間的現在時における話者の感覚や判断は、単に表出されたものであり、他者への伝達を目的としたものではない (笹井 2005, 富樫 2006 参照)。この点を (35) を例に考えてみたい。

(35) 思わず「速っ!」と言ってしまう快足高尾選手 (大牟田)

(<http://www3.coara.or.jp/~atomin/ohmuta2.htm>)

(35) は、野球の試合で相手ピッチャーが投げた速球に手も足も出なかった打者の様子を解説したものである。バッターである高尾選手が、打席で相手ピッチャーの投げた球の速さに反応して、思わず、「速っ」と口に出してしまった場面が記述さ

<sup>16</sup> (32) を通常の形容詞表現を用いて書き換える場合、あるいは、イ落ち構文をそもそも容認しない話者が (32) と同様の文脈で発話する場合、「海 # は / が 青い。」のように、その主語は「は」ではなく「が」で標示しなくてはならない。この書き換え可能性から、イ落ち構文が、categorical judgment ではなく、thetic judgment を表すことが示唆される (Kuroda 1972 参照)。この特徴は、イ落ち構文が瞬間的現在時解釈を受けるという特徴からの帰結だと考えられる。だが、先の例はあくまでも書き換えであり、イ落ち構文が thetic judgment を表すことの直接的な証拠とはいえない。そのため、本稿では上述の可能性を指摘するに留める。

れている。(35)で特徴的なのは、引用されている高尾選手の発話が、相手ピッチャーやその他の選手に球が速いことを伝達しようとしたものではなく、その球の速さに対する自身の感覚・判断を単に表出したものだという点である。

伝達のためにではなく、話し手自身の感覚や判断を表出するために用いられるというイ落ち構文の特徴は、Hirose (1995)、廣瀬 (1997) による言語行為・表現の2分類を用いるとよりの確に記述できる。廣瀬は、聞き手への志向性（以下、「聞き手志向性」と略記）の有無という観点から、(36) に示す言語行為及び言語表現の2分類を提案している。

- (36) a. 伝達を目的とした、社会的営みとしての思考表現行為を「公的表現行為」と呼び、公的表現行為で用いられる言語表現を「公的表現」と呼ぶ。  
 b. 伝達を目的としない、個人的営みとしての思考表現行為を「私的表現行為」と呼び、私的表現行為で用いられる言語表現を「私的表現」と呼ぶ。  
 (廣瀬 1997: 6)

廣瀬 (1997: 7) によれば、公的表現行為と私的表現行為を区別する際の最も重要な基準は、「[公的表現行為] では聞き手の存在を考慮に入れるが、[私的表現行為] では考慮に入れない」という点である。この区分に従うと、(35) の例に関する観察から、イ落ち構文は（私的表現行為を行うために用いられる）私的表現と特徴付けられる（廣瀬の「私的表現」に相当する概念として、森山 (1997) の「独り言」も参照）。

イ落ち構文が私的表現であるという特徴は、(35) の例の解釈だけでなく、文法現象によっても確認できる。イ落ち構文は感嘆詞「わー」と共起することができる。

- (37) まずは、茶渋落としから。スポンジに適量 [の重曹] をふりかけ磨いてみると…びかびかに！「わーすごっ！」と思わず言ってしまうほど面白いくらい綺麗になりました。  
 (<http://www.kanshin.com/keyword/847648>)

Hasegawa (2006) は、Hirose (1995)、廣瀬 (1997) の2分類を踏まえ、感嘆詞「わー」が私的表現でのみ用いられることを指摘している。本稿では、この指摘を「感嘆詞『わー』は共に発話の単位を構成する要素と私的表現を形成する」と解釈する。このことを前提とすると、イ落ち構文が私的表現マーカである感嘆詞「わー」と共起し発話の単位を形成するという (37) の事実は、当該構文が私的表現として機能することを示す。

ここで注意すべき点が1つある。それは、イ落ち構文が、単に私的表現として用いられる傾向が強いというのではなく、私的表現としての機能に特化しているという点である。廣瀬 (1997: 7) によれば、例えば、「雨だよ」のように、呼びかけの終助詞「よ」を含み、聞き手志向性を標示した表現は公的表現としてしか用いられない。それに対し、「雨だ」のように、聞き手指向性を標示していない表現は、言語表現上は私的表現であるが、発話場面等の言語外的要因により聞き手志向性が加

わり、結果的に公的表現として用いられることが可能である。この指摘がイ落ち構文にも当てはまるとすると、(35)と(37)で観察した当該構文が私的表現として機能するという特性（以下、「私的表現性」と略記）は傾向に過ぎないと思われるかもしれない。だが、以下で観察するように、イ落ち構文は私的表現に特化しており、公的表現としては機能できない。

イ落ち構文の私的表現性を示す現象は5つある。まず、イ落ち構文は、呼びかけ表現の「ねえねえ」や「なあなあ」と共起できない。

- (38) a. \*ねえねえ、うまつ。(cf.ねえねえ、うまい(よ。))  
 b. \*なあなあ、臭つ。(cf.なあなあ、臭い(よ。))

廣瀬(1997)によれば、呼びかけ表現「おい」は、聞き手の存在を前提とし、公的表現を導入する。「ねえねえ」や「なあなあ」は、呼びかけ表現という点で「おい」と同等の資格を持つため、共起した表現と公的表現を形成するといえる。このことから、(38)の非文法性は、イ落ち構文が、私的表現に特化しており、公的表現として機能できないことを示す。

次に、イ落ち構文は質問への返答として用いることができない。

- (39) A: このパン食べてみてよ。おいしいでしょ?  
 B: \*うん、うまつ。(cf.うん、うまい(よ。))

(39)の対話におけるBは、Aの質問に対する返答を与えること、すなわち、公的表現行為を期待されている。ところが、イ落ち構文を用いた場合には、Aの質問に対する返答という期待された談話の流れが「うん」の後で断絶し、ちぐはぐな談話となってしまい容認されない。イ落ち構文が問いに対する返答の機能を果たせないという事実も、当該構文が、私的表現であり、公的表現としての機能は持たないことを示している。

第三に、イ落ち構文は、発話動詞「言う」の直接話法補部に現れることはできても、伝達動詞「伝える」の直接話法補部には現れることができない。

- (40) a. 太郎は、花子の部屋に入るなり、「汚っ。」と言った。  
 b. \*太郎は、花子の部屋に入るなり、彼女に「汚っ。」と伝えた。

「言う」という行為は「言葉を口にすること」であり、その際には必ずしも聞き手の存在は前提とされない。それに対し、「伝える」という行為は聞き手が存在して初めて成立する行為である。従って、「言う」の直接話法補部には公的表現も私的表現も現れることができるのに対し、「伝える」の直接話法補部には公的表現しか現れることができない<sup>17</sup>。このことを踏まえると、(40)の対立もイ落ち構文が私的

<sup>17</sup>「伝える」の直接話法補部が公的表現のみを許し私的表現を許さないということには、独立の根拠が存在する。まず、「\*ああ汚いです。」という例について考えてみたい。廣瀬(1997:7)



表現専用の構文であることを示すと考えられる。

第四に、イ落ち構文には形容詞の丁寧体を用いることができない。

(41) \*お安っ。(cf. 安っ。)

「お安い」などの丁寧表現は、聞き手への配慮を含むため、それ自身で公的表現である。(41) が示すように、語彙的に公的表現としてしか機能できない形容詞表現と相性が悪いことから、イ落ち構文が私的表現としてのみ機能することが分かる。

最後に、イ落ち構文は皮肉として用いることができない。日本語では評価を表す同一の形容詞を反復することで皮肉を表すことが可能であるが(例：はいはい、すごいすごい。)、イ落ち構文を反復させて皮肉として用いることはできない。

(42) #すごっすごっ。

(42) が可能になるのは、話者がイ落ち構文を繰り返すことで自身の判断を改めて表出している場合のみである。『大辞泉(増補・新装版)』によれば、「皮肉」という言語行為は、「遠まわしに意地悪く相手を非難すること(下線筆者)」であり、聞き手の存在を前提とする公的表現行為である。従って、皮肉として用いられる言語表現には公的表現が要求される。皮肉として用いることができないという(42)の事実も、イ落ち構文が私的表現に特化していることを示している。

(38) から(42)の事実は、全て、イ落ち構文が私的表現行為専用の構文であり、従って、公的表現を要求する文法的環境には生起できないという一点に収斂する。

### 3.4. イ落ち構文の機能

これまでの観察をまとめると、イ落ち構文は機能的に以下のように特徴付けられる。

(43) イ落ち構文は、話者が、眼前の事態や対象に対し、瞬間的現在時の直感的な感覚や判断を表出する私的表現行為専用の構文である。

イ落ち構文は、2節で観察した(26)の形式的特徴と(43)の機能的特徴を併せ持ち、したがって、構文文法(Goldberg 1995)における「構文」としての地位を持つ<sup>18</sup>。

によれば、丁寧体の助動詞「です」は、聞き手への配慮を表し、公的表現を導入する。「ああ」と「です」が同一の発話には共存できないことから、感嘆詞「ああ」が、「わー」と同様、私的表現を導入することが分かる。このことを踏まえ、「太郎は、花子の部屋に入るなり、『ああ汚い』と言った。／\*太郎は、花子の部屋に入るなり、彼女に『ああ汚い』と伝えた。」という対立について考えてみると、「ああ汚い」という私的表現が「伝える」の直接話法補部に生起できないことから、当該動詞が直接話法補部に公的表現を要求することが分かる。

<sup>18</sup> イ落ち構文を Potts and Roeper (2006) の “expressive small clause” や Iwasaki (2006: 332f.) の “internal state expression” に分類することも可能に思われる。だが、両区分は、その成員に私的表現であることを必ずしも要求しないため、イ落ち構文の機能の特徴付ける際の分類としては最適とはいえない。また、笹井 (2005) は、聞き手志向性を持たない、話し手の感動の表出に特化した体言形式を「感動喚体句」と呼び、その一つに本稿がイ落ち構文と呼ぶ現

### 3.5. 公的表現行為が期待される談話での使用

3.3. 節で、イ落ち構文が私的表現行為専用の構文だということを見た。では、イ落ち構文を公的表現行為が期待される場面で用いることは可能なのだろうか。結論を先回りして述べると、そのような場面でイ落ち構文を用いることは可能である。(44) はピザ会社のコマーシャルでモデルがその会社のピザを口にしてカメラに向かって言う台詞である。

(44) うまっ！ (ピザ会社のコマーシャルより)

このコマーシャルは、ピザ会社が自社のピザの美味しさを視聴者へ伝えようとして制作されたものであり、そこではその制作意図を汲んだ公的表現行為が期待される。(44) が示すように、コマーシャルという談話でイ落ち構文を用いることは可能であるが、その場合には、この構文がまさに私的表現であることにより特殊な効果が生まれる。その効果について、以下、Hasegawa (2006) の私的表現の分析を基に考えてみたい。

Hasegawa は、尊敬語等の公的表現が期待される談話で私的表現である独り言 (soliloquy) を用いると、通常は表に出さない話者の思考内容をさらけ出す (廣瀬 1997: 19f. も参照) ことから、話し手の聞き手に対する信頼や親近感が伝わることを指摘している。

(45) 教師：本当に英語では苦労します。

学生：えー、本当ですかー。

教師：本当、本当。

学生：へー、先生でもそうなんだー。 (Hasegawa 2006: 220)

(45) の学生の最後の発話は、尊敬語等、公的表現行為を行っていることを示す言語表現を含まず、感嘆詞「へー」に導入された私的表現である。Hasegawa は、「学生対教師」という場面であっても、この学生の台詞は教師にとって失礼には聞こえず、学生が自らの率直な感想を表現することにより、かえって学生の教師に対する信頼感や親近感が伝わると述べている。

このことを踏まえて (44) について考えてみたい。イ落ち構文は、私的表現であるため、話者の本音を表す。(イ落ち構文が皮肉として機能しないという (42) の事実も参照。) 従って、宣伝という公的表現行為が期待される場面でイ落ち構文が用いられると、その発話により聞き手は話者の本音を耳にすることになる。結果として、イ落ち構文で用いられる形容詞語幹の意味が一般に好ましいもの (例：う

---

象を分類している。この分類には、イ落ち構文が「感動」の意味を内包しているかどうかは明らかではないという点 (注 14 参照)、富樫 (2006: 169) が指摘するように、イ落ち構文が主語を取るという統語的事実 (2.1 節 (5) 参照) と一致しないという点で問題がある。さらに本稿の目的との関連でいうと、ここで挙げた 3 つの呼称は、本文中で言及している他の呼称と同様、イ落ち構文における形と意味の対応を原理的に説明するものではない。

まっ!)であればあるほど、その発話を聞く側は話し手の好評価を読み取り、好ましくないもの(例:臭っ!)であればあるほど話し手の悪評価を感じる。前者のタイプのイ落ち構文が広告で用いられる理由である。このように、イ落ち構文を公的表現行為が期待される場面で用いると、私的表現であるが故に話者の本音が伝わり、表出される判断や評価がより強調されるという特殊な効果が生まれる。

さらにこの関連で、岩崎・大野(2007: 138, fn. 6)が指摘する次の例について考えてみたい。

- (46) A: [このポテトチップ] あったかくておいしい。  
B: あつ。

岩崎・大野は、(46)の会話におけるBは、イ落ち構文を発話することで、「[Aの]『あったかくておいしい』という肯定的意見に反対する」と指摘している。この指摘から、(46)ではイ落ち構文が反対意見の表明という公的表現行為を果たしているように思われるかもしれない。だが、Bの発話は、(44)の例と同様、言語表現としてはあくまでも私的表現であり、発話時のBの感覚を表出したものに過ぎない。というのも、(47)のように、Bの発話にAに対する反対意見の表明であることを示す言語表現を加えると容認されなくなるからである。(イ落ち構文が質問への返答として機能しないという(39)の事実も参照。)

- (47) A: あったかくておいしい。  
B: \*いや、熱っ。(cf. いや、熱い(よ)。)

(46)においてBの発話がAに対する反対意見を述べているように映るのは、Bが私的表現であるイ落ち構文を用いて感覚を表出したことを聞き、Aを含む周囲の人が、Bの抱いた感覚がAの感覚とは異なると認識するためである。

#### 4. イ落ち構文における形と意味の対応

2節と3節の議論から、イ落ち構文が(26)と(43)にまとめた形式的・機能的特徴を持つことが明らかになった<sup>19</sup>。これを踏まえ、本節ではイ落ち構文の形と意味が見せる相関について考察し、当該構文の形と意味の間には4つの一般的かつ規則的な対応関係があることを論じる。以下ではこのことを、(i)主語の省略と私的表現性の関連、(ii)Tの欠如と瞬間的現在時解釈の関連、(iii)機能範疇の欠如と

<sup>19</sup> 匿名査読者から指摘があったように、Rizzi(1997)の分離CP仮説に基づき、(26)の上位に「私的表現行為」や「直感的な判断」といった個別の意味的特徴を保証する独立した機能範疇を仮定し、イ落ち構文の形と意味を一対一に対応させる分析も可能なように思われる。(例えば、Miyagawa 2011による日本語の主節現象の分析のように、文が表す話し手と聞き手の関係を規定する機能範疇を仮定する方法など。)だが、現時点ではイ落ち構文がそのような機能範疇を含むという形態・統語的証拠が見つかっていない。そのため、本稿では(26)の単純な構造を仮定するに留める(注13も参照)。

私的表現性の関連, (iv) 形式の有標性と機能の特化の関連の順に見ていく<sup>20</sup>。

#### 4.1. 主語の省略と私的表現性

イ落ち構文は root small clause であり, 主語を認可する ((26) 参照)。だが, 2.1 節でも指摘したように, 実際の発話では, イ落ち構文の主語は省略されることが多い。この傾向にはイ落ち構文の私的表現性 ((43) 参照) が深く関わっている。

私的表現であるイ落ち構文では, 聞き手の存在が前提とされず, その使用に当たっては, 話し手中心の「必要以上に言うな」という語用論的原理 (“R principle” (Horn 1984)) が働く (廣瀬 2006: 274f. 参照)。さらに, イ落ち構文の主眼は瞬間的現在時の話者の感覚・判断を表出することであり, その機能を主に担うのは, 形容詞語幹から成る述部である。そのため, イ落ち構文では, 話者にとっては自明の主語に言及する必要がない。このように, イ落ち構文の使用において主語が頻繁に省略され述部のみが発話されるという形式的特徴は, 当該構文が私的表現であるという意味的特徴によって動機づけられている (motivated)<sup>21</sup>。

#### 4.2. T の欠如と瞬間的現在時解釈

イ落ち構文は root small clause (以下, 「RSC」と略記) であり, T を欠く ((26) 参照)。また, イ落ち構文の時制解釈は瞬間的現在時に固定されている ((43) 参照)。イ落ち構文が両特徴を併せ持つという事実は, RSC 一般に関する Progovac (2006) と Paesani (2006) の指摘と関連する。Progovac らによれば, RSC の時制解釈は「今ここ」が基本 (default) である。例えば, Class in session. (Progovac 2006: 36) という RSC が教室の入り口に掲示されていた場合, その掲示を目にした人物は, その人物が掲示を目にしたまさにその時点, すなわち瞬間的現在時において, 教室が講義中だと解釈する<sup>22</sup>。Progovac らが扱っている RSC とイ落ち構文は, 瞬間的現在時解釈を基本の時制解釈として持つか固定されたものとして持つかという点で異なるが, T の欠如と瞬間的現在時解釈の対応を示すという点では共通している。では, この対応関係にはどのような原理が働いているのだろうか。

中右 (1994) によれば, 瞬間的現在時は, 話者が常にそこに存在するという点で無標の時制解釈である。この指摘を踏まえてイ落ち構文について考えてみると, 当

<sup>20</sup> イ落ち構文の意味的特徴のうち, 直感的な感覚・判断を表す点については, (26) の構造とどのように対応しているのかが不明である。この問題は今後の研究に委ねる。

<sup>21</sup> 本稿で「ある関係が動機付けられている」と言う場合, 当該の関係が自然である (成立しても不思議ではない) ことを意味し, その関係が必ず成立しなければならないという含意関係は意味しない (Goldberg 2003: 121 参照)。

<sup>22</sup> Progovac らの扱う RSC では, 瞬間的現在時解釈が「基本」であるという点に注意する必要がある。それらの RSC は, 文脈の影響によって瞬間的現在時以外の時制解釈を受ける場合もある。例えば, Paesani (2006: 148) によれば, Huskies dominant inside and out という RSC が新聞の見出しに使われた場合, 過去の出来事を報告するというニュース一般の特性により, 当該の表現は過去の出来事を表すと解釈される。この点において Progovac らの分析している RSC とイ落ち構文は異なるが, 現時点ではその理由は不明である。

該構文が、Tを欠き、時制に関して形式的に無標であるとともに、時制解釈が瞬間的現在時に固定され、時制に関して意味的にも無標であることが分かる。したがって、イ落ち構文がTを欠くという統語的特徴と当該構文が瞬間的現在時解釈を受けるといふ意味的特徴は、形式の無標性と意味の無標性の一致として捉えられ、動機づけられた関係といえる。

さらに、イ落ち構文がTを欠き瞬間的現在時解釈を受けるといふ特徴は、2.3節(13)で観察した当該構文に終助詞を付加できないという特徴の原因と考えられる。西田(1977: 258f.)によれば、「終助詞は、[中略] 文の叙述や判断をうけて、それに対する話手の感動や詠嘆を表出したり、[中略] 聞き手への働きかけの態度を表明したりして文を完結させる(下線筆者)」ものである。このことから、(13)の例との関連では、「なあ」を用いて自己の気持ちを表出する際も、「よ」を用いて聞き手に自己の認識を持ちかける際も、話し手が(終助詞を除いた)文の表す事態を前もって認識しているという点は共通しているといえる。それに対し、イ落ち構文は、(43)にあるように、話者の眼前の事態に対する瞬間的現在時の直感的な感覚や判断を表出する。つまり、イ落ち構文では、事態の認識とその事態に対する感覚や判断を表出する行為が同時瞬間的に行われる。この構文の機能は上述の終助詞一般の機能とは合致しない。イ落ち構文に公的(呼びかけの「よ」(廣瀬1997: 7))・私的(感嘆の「なあ」(Hasegawa 2006: 224))の区別に関係なく終助詞が付加できない理由である。

本節の議論から、イ落ち構文の主語を「が・は」で標示できないという統語的制約((16), (18)参照)も、当該構文の機能に還元できるように思われるかもしれない。この関連で、以下の2つの指摘について考えてみたい。

- (48) a. 目に見えるシーンを感情(驚き, 意外, 不満などの感情)を込めて述べる臨場感のある文は、全文新情報の文であるから、自動的に「主語をマークする「ハ・ガ」の省略条件」を満たす。(久野・高見2006: 204)
- b. Soliloquy employs only private expressions and normally lacks an overt subject. If a subject is overtly present, it frequently lacks *wa* (topic marker) or *ga* (nominative marker)...
- (Hasegawa 2006: 224)

(43)のイ落ち構文の機能的特徴は、(48)に挙げた「が・は」の省略条件を満たしている。だが、それらの条件は、主語に付加される「が・は」を省略できる場合を述べたものであって、主語に「が・は」を標示してはならない環境を規定したものではない。つまり、(48)は問題の制約に対する説明にはならない。このことから、本稿では、主語を「が・は」でマークできないという特徴は、(26)のイ落ち構文の統語構造に起因するものとみなす(2.4節も参照)。

#### 4.3. 機能範疇の欠如と私的表現性

イ落ち構文は、文の基本的骨格を形成するC, T, Negの機能範疇を欠いている((26)参照)。意味的には、イ落ち構文は、私的表現行為専用の構文であり、聞き

手志向性を欠いている ((43) 参照)。このことから、イ落ち構文では、機能範疇の欠如と聞き手志向性の欠如が類像的 (iconic) に対応しているといえる。

廣瀬 (1997: 6ff.) によれば、公的表現は話者の思いや感覚を述べる私的表現に聞き手志向性が加わることで成立している。この仮説に従って意味構造の観点から私的表現と公的表現を比較すると、聞き手志向性を欠くという点で、私的表現の方が公的表現よりも意味的に単純だといえる。この関連で、Haiman (1985: 147) の “Formal complexity corresponds to conceptual complexity.” という指摘を考えてみたい。Haiman が述べる「複雑な形式は複雑な意味に対応する」という類像関係は、同時に、「簡潔な形式は簡潔な意味に対応する」ことを示唆する。このことを踏まえると、イ落ち構文が見せる機能範疇の欠如と聞き手志向性の欠如の対応は、上述の一般的類像関係の個別例とみなすことができる。

イ落ち構文が示すこの類像性は恣意的なものではない。Fukui (1988: 267) は、原理とパラメータのアプローチの観点から、“[O]nly functional categories are subject to crosslinguistic variation.” という仮説を提案している。この仮説に従えば、機能範疇には個別言語の文法的慣習が反映されることになる。ここで、文法的慣習を社会的規範の一種とみなすと、イ落ち構文は、機能範疇を欠き、統語的に社会的規範から自由だといえる。また、イ落ち構文は、私的表現に特化しており、聞き手への配慮を含まないため、意味的にも社会的規範から自由である。従って、イ落ち構文が見せる機能範疇の欠如と聞き手志向性の欠如の類像性は、「社会的規範から自由」という特性が形と意味の両方に反映された結果として捉えられ、動機付けられたものといえる。

#### 4.4. 形式の有標性と機能の特化

イ落ち構文は形容詞終止形活用語尾を欠いている ((26) 参照)。日本語は膠着言語 (agglutinative language) であり、形容詞語幹は、通常、活用語尾による形態的支えを必要とする。このことを踏まえると、イ落ち構文は日本語の文法体系における有標 (破格) 形式だといえる。(言語表現の有標性を判断する際に、「形態的に標示されているか否か」だけでなく、「ある基準に照らして正常か否か」という基準も用いるアプローチについては、特に Levinson (2000) を参照。) 次に意味的な側面について考えてみると、イ落ち構文は私的表現に特化した構文である ((43) 参照)。

イ落ち構文とは対照的に、形容詞終止形活用語尾を含み形式的に無標 (標準的) な形容詞構文は、文脈次第で私的表現としても ((49a)) 公的表現としても ((49b)) 機能できる。

- (49) a. 「わーすごい！」と思わず言ってしまうほど面白いくらい綺麗になりました。(cf.(37))  
 b. 太郎は、花子の部屋に入るなり、彼女に「汚い(よ)。」と伝えた。(cf.(40b))

このように、形式的に有標なイ落ち構文が私的表現に特化しているのに対し、形式的に無標な形容詞構文は私的表現・公的表現のどちらにも用いられる。

Konno (2005) は、日英語の破格的文法現象を観察し、「ある文法形式が当該言語の通常の文法的慣習からみて有標な場合、その形式の機能は、対応する無標形式の機能に比べ、特化している。」という記述の一般化を提案している（同趣旨の指摘については Battistella 1996: 134 や Hilferty 2003: 199 を参照）。本節で観察した形式的に有標なイ落ち構文が形式的に無標な形容詞構文よりも意味の守備範囲が狭いという事実は、Konno が指摘する破格構文一般に成り立つ形と意味の対応関係に合致している。

## 5. おわりに

本稿では、(i) イ落ち構文の形と意味を記述し、当該構文が話者の瞬間的現在時の感覚や判断を表出する私的表現専用の root small clause だということを示し、さらに、(ii) 動機付け・類像性・有標性の観点から、イ落ち構文の形と意味の間には、当該構文のみに限定されない一般的かつ規則的な対応関係があることを論じた。本稿で提示した分析が正しければ、イ落ち構文は、一見異常で不規則と思われる例外的現象の背後に、実は正常で規則的な形と意味の対応関係が潜んでいる場合があることを示す好例といえる。

本稿ではイ落ち構文における形と意味のインターフェイスに焦点を絞った。匿名査読者によれば、2 節 (26) の統語的特徴と 3 節 (43) の意味的特徴を併せ持つ現象はイ落ち構文以外にも存在する可能性がある。現時点では、イ落ち構文と完全に同質の構文が存在するか否かは不明だが、イ落ち構文と、部分的にはあるものの、統語的・意味的特徴を共有する現象は日本語及び英語に存在する。以下では、それらの現象とイ落ち構文との共通点と相違点を観察し、今後の研究の方向性について若干考察を加えたい。なお、以下で指摘する問題は本稿の目的を超えるため、その詳細については稿を改めて論じることとする。

イ落ち構文と関連する日本語の現象は、4.2 節で論じた T の欠如と瞬間的現在時解釈の対応に関するものである。匿名査読者によれば、(50a) は形容名詞からの「イ落ち」、(50b) は助動詞「～たい」からの「イ落ち」を含み、形態的にイ落ち構文と共通している。

- (50) a. わー、うまそっ！  
b. (映画のポスターを見て) わー、見たっ！

さらに、これらの表現は、瞬間的現在時における話者の推量 ((50a)) や願望 ((50b)) を表出し、意味的にもイ落ち構文と共通部分を持つ。しかし、イ落ち構文と両表現には相違点も存在する。

- (51) a. 今日みたいに暑い日はビールがうまそっ！

- b. (おみやげのケーキをもらって) わー, それすぐ食べたっ! (cf. \*その車速っ!)

(50a) のダ落ちに関しては, (51a) のように, (ダ落ち部分が直接話法的解釈を受けずに) 主語名詞句を主格で標示することが可能である。(50b) の助動詞「～たい」からのイ落ちに関しては, (51b) のように, 話し手が聞き手との距離を意識した場合に可能な直示的表現を主語に取ることができる ((51b) の例文及び容認度判断は査読者による)。現時点では, イ落ち構文と (50) の各表現の違いが正確に何に起因するのかわからない。一つの要因として, イ落ち構文が話者の感覚や判断を直接表す形容詞終止形からの「い」の脱落であるのに対し, (50) の各表現が「～そうだ」や「～たい」というモダリティ要素からの「だ」や「い」の脱落であるという点が挙げられるが, ここではこの可能性を指摘するに留める。

英語の mad magazine 構文 (例: Him wear a tuxedo?! (Akmajian 1984: 2), 以下, 「MM 構文」と略記) では, 4.3 節で論じた機能範疇の欠如と聞き手志向性の欠如との類似性と同様の関係が観察される。Akmajian (1984) によれば, MM 構文は文が表す事態に対する話者の驚きや不信を表す。また, MM 構文では, (i) 主格付与子の T が存在せず, (ii) 主動詞が原形で現れ, さらに, (iii) 主語名詞句に代名詞が用いられた場合, What! {Her/\*She} call me up?! Never. (Akmajian 1984: 3) という対立が示すように, その代名詞は, 主格ではなく, 英語における無標の格である対格で標示される (同様の分析については Progovac 2006 も参照)。

以上の Akmajian による MM 構文の記述を踏まえ, 以下の対立を見てもらいたい。

- (52) Hearing from Tom that Bronsky went to the party in a tuxedo,  
 a. Mary said “Him wear a tuxedo?!”  
 b. ??Mary told him “Him wear a tuxedo?!”

明石 (2001) によれば, 動詞 say は聞き手の存在を必ずしも前提としていないのに対し, 動詞 tell は聞き手の存在を前提としている。これを踏まえると, say の直接話法補部には私的表現・公的表現共に生起できるのに対し, tell の直接話法補部には公的表現しか生起できないと考えられる。したがって, (52) の対立は, MM 構文が私的表現行為専用の構文であることを示唆する (cf. (40))。このように, MM 構文は, 機能範疇 (の T) と聞き手志向性を共に欠き, イ落ち構文と同様の類似性を示す<sup>23</sup>。(ただし, (52) の例から明らかなように, MM 構文では時制解釈が過去時になることも可能なため, イ落ち構文と MM 構文を完全に同質なものとは見なせない。)したがって, 機能範疇の欠如と聞き手志向性の欠如の対応という類似性は,

<sup>23</sup> Akmajian (1984: 5, fn.5) によれば, MM 構文は not の生起を許す。そのため, MM 構文における機能範疇の欠如はイ落ち構文のものとは質的に異なると思われるかもしれない。だが, Hayashi (1988) に従い, T を欠く節には構成要素否定の not のみが生起可能であると仮定すれば, 両構文における機能範疇の欠如は同質とみなすことができる。



イ落ち構文に限定されない一般的なものである可能性がある。また、この類像性は、その逆の関係、すなわち機能範疇が存在することと聞き手志向性が存在することが対応する可能性を示唆する（今野 2010 参照）。

## 参 照 文 献

- 明石博光 (2001) 「与格交替と発話行為動詞」『英語語法文法研究』8: 54-69.
- Akmajian, Adrian (1984) Sentence types and the form-function fit. *Natural Language and Linguistic Theory* 2: 1-23.
- Battistella, Edwin L. (1996) *The logic of markedness*. New York: Oxford University Press.
- Bowers, John (1993) The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24: 591-656.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Costa, João and Anabela Gonçalves (1999) Minimal projections: Evidence from defective constructions in European Portuguese. *Catalan Working Papers in Linguistics* 7: 59-69.
- Dikken, Marcel den (2006) *Relators and linkers: The syntax of predication, predicate inversion, and copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.
- ドルス, フランス・小林康夫 (2005) 『日本語の森を歩いて—フランス語から見た日本語学』東京：講談社.
- Fukui, Naoki (1988) Deriving the differences between English and Japanese: A case study in parametric syntax. *English Linguistics* 5: 249-270.
- Fukui, Naoki and Hiromu Sakai (2003) The visibility guideline for functional categories: Verb raising in Japanese and related issues. *Lingua* 113: 321-375.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (2003) Words by default: The Persian complex predicate construction. In: Elaine J. Francis and Laura Michaelis (eds.) *Mismatch: Form-function incongruity and the architecture of grammar*, 117-146. Stanford: CSLI Publications.
- Haiman, John (1985) *Natural syntax: Iconicity and erosion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hasegawa, Yoko (2006) Embedded soliloquy and affective stances in Japanese. In: Satoko Suzuki (ed.) *Emotive communication in Japanese*, 209-229. Amsterdam: John Benjamins.
- Hayashi, Ryujiro (1988) A note on *not*. *English Linguistics* 5: 197-203.
- Hilferty, Joseph (2003) In defense of grammatical constructions. Unpublished doctoral dissertation, University of Barcelona.
- Hirose, Yukio (1995) Direct and indirect speech as quotations of public and private expression. *Lingua* 95: 223-238.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」中右実(編)『指示と照応と否定』1-89. 東京：研究社.
- 廣瀬幸生 (2006) 「日記英語における空主語と主体化」卯城祐司・太田聡・田中伸一・山田英二・太田一昭・滝沢直宏・西田光一(編)『言葉の絆—藤原保明博士還暦記念論文集—』270-283. 東京：開拓社.
- Horn, Laurence R. (1984) Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. In: Deborah Schiffrin (ed.) *Meaning, form, and use in context: Linguistic applications*, 11-42. Washington: Georgetown University Press.
- Iwasaki, Shoichi (2006) The structure of internal-state expressions in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 14: 331-342.
- 岩崎勝一・大野剛 (2007) 「『即時文』・『非即時文』—言語学の方法論と既成概念—」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『時間の中の文と発話』135-157. 東京：ひつじ書房.
- 小林摩耶 (2005) 「形容動詞と形容詞の統語的相違」『日本語文法』5(2): 145-160.
- Konno, Hiroaki (2005) On the relation between formal markedness and functional specialization: A descriptive analysis of peripheral phenomena in English and Japanese. Unpublished doctoral dissertation, University of Tsukuba.

- 今野弘章 (2005) 「イ落ち」日本英語学会第 23 回大会ワークショップ「多角的視点からのインターフェイス研究に向けて」における口頭発表, 九州大学.
- 今野弘章 (2010) 「機能範疇の有無と伝達意図の有無の相関」日本英語学会第 28 回大会ワークショップ「迂言と縮約と日英語の差異」における口頭発表, 日本大学.
- 久野暲・高見健一 (2006) 『日本語機能的構文研究』東京: 大修館書店.
- Kuroda, S.-Y. (1972) The categorial and the thetic judgment: Evidence from Japanese syntax. *Foundations of Language* 9: 153–185.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru (2011) Agreements that occur mainly in the main clause. Ms., MIT (downloadable at <http://ling.auf.net/lingBuzz/001244>).
- 森山卓郎 (1997) 『「独り言」をめぐって—思考の言語と伝達の言語—』川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法—体系と方法—』173–188. 東京: ひつじ書房.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』東京: 大修館書店.
- 新村出 (編) (1998) 『広辞苑 (第五版)』東京: 岩波書店.
- 西田直敏 (1977) 「助詞 (1)」大野晋・柴田武 (編) 『岩波講座日本語 7: 文法 II』191–289. 東京: 岩波書店.
- Nishiyama, Kunio (1999) Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183–222.
- 仁田義雄 (1997) 「未展開文をめぐって」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法—体系と方法—』1–24. 東京: ひつじ書房.
- Paesani, Kate (2006) Extending the nonsentential analysis: The case of special registers. In: Ljiljana Progovac, Kate Paesani, Eugenia Casielles, and Ellen Barton (eds.) *The syntax of nonsententials: Multi-disciplinary perspectives*, 147–182. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Pereltsvaig, Asya (2006) Small nominals. *Natural Language and Linguistic Theory* 24: 433–500.
- Potts, Christopher and Tom Roeper (2006) The narrowing acquisition path: From expressive small clauses to declaratives. In: Ljiljana Progovac, Kate Paesani, Eugenia Casielles, and Ellen Barton (eds.) *The syntax of nonsententials: Multi-disciplinary perspectives*, 183–201. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Progovac, Ljiljana (2006) The syntax of nonsententials: Small clauses and phrases at the root. In: Ljiljana Progovac, Kate Paesani, Eugenia Casielles, and Ellen Barton (eds.) *The syntax of nonsententials: Multi-disciplinary perspectives*, 33–71. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic theory and the structure of English: A minimalist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar: Handbook of generative syntax*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.
- 笹井香 (2005) 「現代語の感動喚体句の構造と形式」『日本文芸研究』57(2): 1–21. 関西学院大学. 小学館『大辞泉』編集部 (1998) 『大辞泉 (増補・新装版)』東京: 小学館.
- Sigurðsson, Halldór Ármann and Joan Maling (2009) Silent heads. Ms., Lund University and Brandeis University (downloadable at <http://ling.auf.net/lingBuzz/000815>).
- Stowell, Tim (1983) Subjects across categories. *The Linguistic Review* 2: 285–312.
- 杉浦秀行 (2006) 「『さむっ』、『うまっ』などに見られる文法化に関する考察: 構文文法の視点」『日本認知言語学会論文集』6: 382–389.
- 砂川有里子 (2004) 「きもい・きしょい・うざい」北原保雄 (編) 『問題な日本語』128–133. 東京: 大修館書店.
- Takezawa, Koichi (1987) A configurational approach to Case-marking in Japanese. Unpublished doctoral dissertation, University of Washington, Seattle.
- 竹沢幸一 (1998) 「格の役割と統語構造」中右実 (編) 『格と語順と統語構造』1–102. 東京: 研究社.
- Thráinsson, Höskuldur (1996) On the (non-)universality of functional categories. In: Werner Abraham, Samuel David Epstein, Höskuldur Thráinsson, and C. Jan-Wouter Zwart (eds.) *Minimal ideas: Syntactic studies in the minimalist framework*, 253–281. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

富樫純一 (2006) 「形容詞語幹単独用法について—その制約と心的手続き—」『日本語学会  
2006 年度春季大会予稿集』165–172.

Yokogoshi, Azusa (2003) On the syntactic status of small clause particles in English. *English Linguistics*  
20: 518–534.

執筆者連絡先：

[受領日 2011 年 6 月 21 日

〒195-8585 東京都町田市金井町 2160

最終原稿受理日 2011 年 11 月 1 日]

和光大学表現学部総合文化学科

konno@wako.ac.jp

## Abstract

### The Japanese Adjectival Conjugational Ending Drop Construction: From a Syntax-Semantics Interface Perspective

HIROAKI KONNO

*Wako University*

This paper deals with the Japanese adjectival conjugational ending drop construction (abbreviated as “ACED”), exemplified by utterances such as *Dasa?!* (“Uncool!”) and *Kimochiwaru?!* (“Disgusting!”). (The symbol “?” represents a glottal stop in the examples.) Providing a thorough description of the syntax and semantics of the ACED construction, I argue that the construction contains certain systematic form-meaning correspondences. The ACED construction is peculiar both syntactically and semantically. Syntactically, it lacks the basic clausal functional categories C, T, and Neg and consists solely of an optional subject NP and an adjectival base followed by a glottal stop. It is therefore characterized as a “root small clause” in the sense of Progovac (2006). On the functional side, the ACED construction “expresses” (as opposed to “communicates”) the speaker’s immediate reaction to a given situation in which he/she is involved at the time of utterance and is used exclusively to perform what Hirose (1995, 1997) calls a “private (as opposed to ‘public’) expression act,” one that does not have any communicative intention on the part of the speaker. These observations are related naturally from a syntax-semantics interface standpoint in terms of motivation, iconicity, and markedness.